

# 「米はき観音」 徳島市助任町の話

徳島が「阿波の国」と言われていたころのお話です。助任に弘誓寺というお寺がありました。とても貧しく、寺を囲む塀はあちこち崩れていました。この寺のお坊さんは一日中、念仏だけを唱えていました。しかし、念仏を唱えることにいっしょうけんめいだったので、お寺はますます貧しくなっていきました。

ある日、小坊主がお坊さんに言いました。

「お坊さま、朝ご飯のお米がございません。どうしましょうか。」

「米が無くなったら、芋があります。芋がなくなったら、何も食べないで念仏を唱えなさい。」このお坊さんの返事を聞いて、仕方なくお寺のお金になりそうなものを全て売って、お米を買いました。

そんなわけで、たくさんいたお寺の小坊主たちはいなくなり、欲張りな小坊主が一人だけになつてしまいました。その小坊主が、

「もう、残っているのはお坊さんが毎日、拝んでいらつしやる観音様だけです。これを売りましょう。」と言うと、お坊さんは

「何という罰当たりなことを言うのだ。何も考えず、拝めば、道が見えてくるものだ。お前も、拝みなさい。」と怒りました。

小坊主は（バカみたいだ。）と、お前も、お米が、食べられるなら、誰も苦勞はしない。と、心の中で、思いながら、念仏を唱えました。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ…」と、しばらく拝んでいると、変な音が、聞こえてきました。

ザア、ザア、ザア、パラ、パラ、パラ… 見ると、目の前の観音様が、米をはきだして、いたのです。きらきら光るお米は、たつぷり二人分ありました。これがうわさになり、たくさんのお坊主が、見にくるようになり、お賽銭（お参りした時にお供えするお金）が増え、少しお寺も楽になってきました。ところが、欲張りな小坊主は、もつと観音様が、お米を、はいてくれたら、儲けることができる、と考えました。

ある日、いつものように、観音様が、お米をはき始めると、小坊主は観音様の口に、熱くなった、真っ赤な火箸を入れて、口を大きくしようとしました。

「さあ、もつと、口を開ける。もつと、たくさん、米をはくんだ。」

しかし、その後、観音様は、米をはかなくなり、そして弘誓寺は、元の貧しい寺に戻つてしまいました。小坊主は、その後、寺を追い出されたとか、観音様の罰を受けて、死んだとか言われています。誰も

この小坊主が、どうなったかは、知りません。